

親が精神障害 子の孤立防げ

統合失調症など精神障害のある親がいる子どもが、孤立しないように対話や情報交換の場を提供するため、三重大学看護学科の土田幸子助教(46)が支援グループを立ち上げて活動している。精神障害者自身やその親に比べ、子どもへの取り組みは遅れていて、全国的にも珍しい取り組みだ。

(高浜行人)

三重大助教が支援グループ

土田助教らは2009年9月、一親&子どものサポートを考える会を立ち上げた。薬や入院について助言する機会、一親&子どものサポート体験を共有したり、専門家が会を設けたりしている。



「親&子どものサポートを考える会」の意見交換会＝2010年10月、名古屋市、土田幸子助教提供

劣等感・絶望感…専門家が助言

インタビュー」を3回開いた。精神障害の親がいる20、40代の女性3、4人が集まり、会のメンバーの精神科医ら専門家が耳を傾けた。

「近所の人に『お母さんはいつも寝ているね』って言われて…。精神科に行っているとは言えない。人と話す時、いつも恐怖感がある」。

津市の30代女性が打ち明けると、共感の声が続いた。

女性「薬を飲んで寝ていることが多かった母(61)の病状や、多感だった10代半ばに病気が原因で両親が離婚したことなどを明かした。『同じ境遇の人と話して、同じ思いを持っていて、と大きな安心感を感じた』と語る。

愛知県内の女性(46)は小学生の頃、スパーでアルバイト中に独り言を言う母(69)について、悪口を言われていることを友人を通じて知った経験をお話した。「隠すのに精いっぱい。知られたら終わりだっけ…。」女性「精神科医とも話し合い、母に合う薬

を探すため、20年ぶりに入院させることを決めた。

土田助教によると、このような子どもたちは、被害妄想やパニックといった症状に苦しむ保護者を助けなければならぬケースが多い。そのため、劣等感や絶望感などで発達上の問題を抱えやすく、社会から孤立しがちだという。

土田助教は「中高生も利用できるような態勢を整えたい」と話した。

東京都内で統合失調症の母親と暮らし、「わが家の母は『ビョーキです』」などの著作があるマンガ家の中村ユキさん(37)は「子どもに焦点を当てて専門家が支援するケースはこれまでになく、貴重な活動だ。健全な心の育成のために広げてほしい」と話す。

をすれば、親の精神障害で適切な保護を受けていなかったケースを見てきた。どのような療育が必要か調べたが、実態はほとんど分からず、支援もないと知った。

体験談など講演 三重大で6日

「親&子どものサポートを考える会」は6日午後1時半から、津市の三重大学で「精神障害の母から生まれて…」と題して、東京都精神障害者家族会連合会会長の野村忠良さん(67)の講演会を開く。

野村さんは、20年前に80歳で亡くなるまで50年以上にわたって精神障害に苦しんだ母との生活を振り返る。母の被害妄想などで友人を失い、自殺した姉への思いや、子どもの支援のあり方などを語る。

野村さんは「精神障害者の子どもは、家庭の秘密の中で孤立し、姿が見えにくい。今後この活動が幅を広げ、家族全員を支援する活動になってくれれば」と話している。会場は、医学部臨床第3講義室。無料。問い合わせは土田助教(059・231・5260)へ。